Chapter 3

懐かしさのルーツを知れば…

日本一懐かしい遊園地とも言われている、中央児童遊園「るなぱあく」。三世代にわたってたくさんの市民に親しまれています。

昭和40年代の飛行塔
（阿部勇一さん提供）

元市職員として
みんなの力で開催できました

グランドフェアは、戦災復興、市制施行60周年、市町村合併、当時の市庁舎新築落成などを記念して行われました。戦災や物資の不足、3年連続の大きな台風被害などで誰もが苦労した時代でしたが、市役所だけでなく、市民の皆さんの献身的な努力で復興が進んだのです。

元市職員
船津　正作さん　83歳

普段何気なく利用しているるなぱあくにも、数々の困難を乗り越えて戦後復興を果たした当時の市民の思いが込められていたのです。そこで、グランドフェアを知る人と実際にるなぱあくを利用している人に、本市の戦後復興をどう思うか聞いてみました。

るなぱあくが開園したのは昭和29年。戦災復興などを記念して開催された「前橋グランド・フェアー」の第2会場として整備されたのが始まりです。豆自動車や飛行塔は形を変えつつも開園時から現在の場所に。もくば館は今も現役で子どもたちを楽しませています。

来園者インタビュー

これからも変わらずにあってほしい

天川大島町
田中さん　60歳代と2人のお孫さん

るなぱあくは、孫が好きなのでよく連れてきます。自分も含め、子ども、孫と三世代で通っています。ここが戦災復興イベントの会場だったことはあまり詳しくは知りませんでした。戦災復興に関わるような碑など、知らせる手だてが身近にもっとあったらいいのではないかと思います。そのような歴史も含め、この場所がこれからも、変わらずにあってほしいと思います。

祭りの粋専門店マメゼン店主
岸　篤美さん　68歳

お祭りから見た復興
楽しみたい気持ちが、復興につながったのかな

初期の前橋まつりは、復興祭として車のパレードや商店街単位の祭事をやっていました。当時は復興というものを意識せず、ただみんなで楽しみたいという気持ちのほうが大きかったんじゃないかな。戦争で暗くなってしまった雰囲気を少しでも明るく前向きにしたい、という思いでお祭りをしていました。復興祭として始まった前橋まつりですが、お祭りで復興を目指すというより、人々の前向きな気持ちが、結果として前橋の復興につながったのではないですかね。その後、商店街単位でやっていたものを、たくさんの市民が参加するようになり、おみこしを担いだり、踊ったりと現在の形に近づいていきました。

長い間中心商店街でまつり用品店を営んでいますが、中心商店街に活気が戻っていく姿は今でも思い出されます。

今後の前橋まつりはもっともっとたくさんの人に参加してほしいです。お祭りにはさまざまな楽しみ方がある。その楽しみ方を知ってもらえれば参加する人も増えると思います。やっぱりお祭りはみんなで楽しみたいですよね。

前橋3大まつりの一つの前橋まつりと、夏の風物詩・前橋花火大会。この二つは戦後間もない昭和23年8月15日に行われた、復興祭が元になっています。復興祭は翌年から商工祭、昭和34年から前橋まつりへと名前を変え、現在まで続いています。また、花火大会は商工祭や前橋まつり、七夕まつりのイベントなどを経て、一時中断しましたが現在の形になりました。

インタビュー
戦前のにぎわい取り戻そうとみんな必死だったんですよ

ヒロタ 相談役
廣田　稔さん　82歳

熊野神社のお酉さまの祭りは、すごいにぎわいだったんですよ。戦前の祭りは、通りがぎゅうぎゅうで歩けなかった。戦前のにぎわいの記憶が、子どもながらに強烈にあって、ずっとそれを追いかけていたのかもしれませんね。

前橋まつりが復興祭として始まった頃は、戦後もいいとこ。バラックも多かった。そんな状況でみんな必死でしたよ。それでも昔のにぎわいを知っていましたから、一日も早くにぎわいを取り戻そうと思っていました。それが前橋まつりの発展につながったのかもしれませんね。